

佛心

二〇二三年二月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会

持ち合わせ、ありとあらゆる修行を成就した者だけが救われる仏道ではありません。



報恩講をご縁に

先月の15日は、報恩講の法要をご縁に、皆さんと一緒に阿弥陀如来そして親鸞聖人に合掌をさせていただきました。報恩講は、浄土真宗にとって最も大事な法要と言われています。

親鸞聖人は、浄土真宗の御開山です。が、元々は比叡山で修行を積む、天台宗の僧侶でした。しかし、さらなる自身の救われる道を求めて、8歳の時に比叡山を降りることとなります。そして、下山された際に、のちのお師匠となる法然聖人と出会われ、念仏の仏道を歩まれることとなりました。

その念仏の仏道とは、阿弥陀如来のおはたらきによって救われる仏道です。それは、決して何か特別な才能を

念仏の仏道は、阿弥陀如来が、私たちのいのちのうえに「南無阿弥陀仏」という声の仏様となつて、響き渡り、そのままの私をお浄土へ迎えて入れてくれるみ教えです。

このみ教えは、親鸞聖人が作ったわけでも、法然聖人が作り上げたものでもありません。800年以上も前のお釈迦さまが説かれ、それがインドから中国、中国から日本、そして日本からここカナダへ、脈々と受け継がれてきた、変わらない御法義なのです。

最近、この「変わらないもの」こそが、本物ではないだろうか考えることがあります。というのも、ここ最近コロナが明けたこともあり、若い人がよくお寺へ出入りしてくれることが増えました。そこである年配の御門徒さんから言われたことがあります。

「先生たちの話は、確かにありがた。しかし、お坊さんは皆、口を揃えて“死んだら浄土、死んだら浄土”とい

う。しかし、それでは若者に、なかなか分かってもらえない。例えば、どうのように生きるか、といった話をする方がいいんじゃないか？」と言われました。

私自身も、僧侶はもつと社会問題に目を向けて、生きることについて親身に考えていかなければならないと思います。確かに仏教は、死後の世界のことでだけを説いている訳ではありません。

仏教徒としての生き方、つまりは生きていくうちにどのようにして仏道を歩み、さとりに至るかということも説かれています。

実は、私が大学生だったときに、一度本気でさとりを目指したことがあります。京都の臨済宗のお寺、東福寺へ早朝の5時に出向き、畳の雑巾掛けをして、小一時間ほど坐禅をさせてもらいました。

2年ぐらい経つと、足も慣れてきて、座り方は分かってきました。しかし、座禅の極意はよく分からないままでした。それからまた1年ぐらい経ち、ある修行僧の雲水さんと仲良くなり、彼のお師匠さんと話す機会をいた

できました。

そこで思い切って質問を試みようと。「悟ったらどうなるんですか？」と。すると一言「君なあ、悟ってもなんも変わらへんで」と言われました。

私は、悟りを開くと人生観が一転して、生き方が劇的に変わると信じていたので、彼のその言葉が全く理解できませんでした。ましてや仏教では、諸行無常といって、あらゆるものは常に移り変わると説きます。しかし、その禅のお坊さんから言われたのは「なんも変わらへんで」でした。

それから月日が経ち、その言葉の真意が分からないまま、とうとうカナダへ着任することになりました。トロント仏教会の業務や仏事に追われて、いつの間にか、その言葉も私の頭から離れていきました。

しかし、ある葬儀を勤めたとき、遺族が読まれた弔辞を聞いて、当時のその言葉を思い出すことができました。

その弔辞を読んだ彼女は、パンデミック中、父親と母親を同時に亡くされていました。彼女は深い喪失感に襲

われて、家に引き籠るようになったそうです。パンデミック中だったこともあり、葬儀もすぐに執り行うことができませんでした。

少しでも外に出ることを夫から勧められた彼女は、もともと趣味であったサイクリングをしに外へ出たそうです。そして、自転車でいろんな場所へ行くうちに、様々なことを思い出したと言っていました。

子ども連れの家族が買い物をしているのを見ると、自分が幼かった頃に母親と一緒に行って、お菓子をねだって買ってもらったこと。

自分の生まれ育った家と同じような一戸建てを見つけると、小学生だったときに、両親と家の前の階段に座って、一緒にアイスクャンディーを食べたこと。

湖岸沿いに差し掛かると、ある親が子どもを大きな声で呼んでいるのを見た。その情景が、自分のかつての両親の姿と重なり、懐かしく、そして寂しくも思えた。

そして、帰り道に、お年寄りが一人で外を歩いているのを見かけたときは、散歩が大好きだった父親の姿を思い出した。

これらの情景は、彼女にとって大変つらいものだったそうです。なぜなら自分がこんなに悲しみの淵で苦しんでいるのに、この世界は一向に変わってくれないからです。

私たちは誰か大切な人を亡くしたとき、この世界が私たちと一緒に立ち止まって、そばにいてくれることを望みます。しかし、公園では子どもたちが元気に駆け回り、窓の外では近所さんの笑い声が聞こえてくる。

この世界は何事もなかったかのように流れ、自分一人を置き去りにしていくような感覚に囚われてしまいます。

しかし、しばらくすると、彼女はそれこそが自分にとって必要な世界であると気づいたそうです。彼女が見てきた風景は、さびしくも、かつての楽しかった思い出であり、両親からもらったかけがえのない時間であったと感じるようになったからです。

この弔辞を聞いてから、私が学生のとくにももらった言葉、「君なあ、悟ってもな、何も変わらへんで」を、お葬儀を執り行うときに、いつも思い出し

ます。

きっとあのお坊さんが私に伝えたかったのは、「悟っても、この世の物事は、自分の思い通りに変わらへんで」ということだったのです。

たしかに、仏教では諸行無常といって、私たちの人生観は、いろんな要因から、物事が移り変わっていくように見えます。そして、その移り変わる人生をどのように歩むのかという、生き方を考えることは大事なことです。

ただ、それは同時に「死んだら浄土」という、死に方を仏教を通して学ぶことも同じくらい大事だと思います。なぜなら、死に方を考えることは、この私の思い通りに変わらない世界をどのように生きるかを考えることに直結するからです。

死ぬ間際に、死後の世界に不安を感じながら、人生の最後を迎えるのか。ありのままの私を抱き取ってくださいる仏様の変わらないお慈悲を感じ、念仏を通して合掌しながら往生するのか。

私はやっぱり、仏様にすべて任せ、安心してきつて、このいのちを閉じていきたいと思えます。

その私たちが手を合わせる仏様、阿彌陀如来は、私たちに決して「変われ」と突きつけてくる仏様ではありません。

そのままのあなたでいい、いやそのままのあなたがいいんだと、このわたしたちの命にいつでもどこでも変わらず響き渡ってくれる仏様です。

その阿彌陀如来のお慈悲を、何百年、何千年と変わることなく、いまの私たちに伝えてくださったのが、お釈迦さまであり、七高僧であり、そして親鸞聖人です。

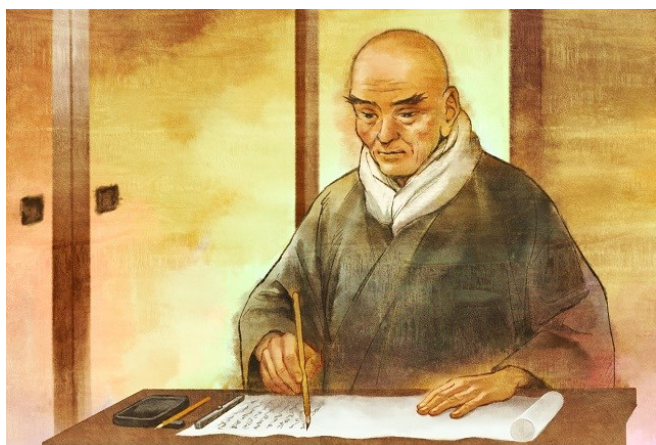
聖人は、89歳という当時ではかなりの長寿で、ご往生されました。それは同時に、多くの名もなき念仏者を聖人自身が、看取ってきたことを意味します。

その別れ際、阿彌陀如来にすべてをお任せした念仏者は、誰一人としてとり残されることなく、浄土へ往かれたと思うと、聖人もまた阿彌陀如来に深々と合掌していたのではないでしようか。

その聖人が私たちに教えてくださる、決して変わらないご法義とその遺徳に、報恩講をご縁として、合掌させていただきました。

トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真



法要のお知らせ

祥月法要（2023年2月5日）（2023年3月5日）

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：2023年2月5日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

場所：トロント仏教会

※英語法要のみZoom配信をさせていただきます。

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<tbcc@tbcc.on.ca>までお知らせください。寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。



ねはんえ 涅槃会

日時：2023年2月19日(日曜日) 午前11時(英語)

2月16日は、お釈迦様がお亡くなりになった日にちで「涅槃会」といいます。

自分の死が近いことを察したお釈迦さまは、弟子たちにこう説かれました。

「私の亡きあとは、私ではなく自分自身をより所として、また私が伝えた教えを、闇を照らすともしびとして、歩んでゆきなさい。」お釈迦さまは、個人崇拜の対象となることを否定され、弟子一人ひとりが確かに、自立して進むことを求めたのでした。そして「もろもろの存在は変わりゆく。怠らず精進しなさい。」という最期の言葉を残し、静かに息をひきとったのでした。

お釈迦さまのご命日である涅槃会の日には、全世界各地の寺院でお釈迦さまのそのご遺徳をしのぶ法要が行われます。

